

駆け抜けた年月

元基礎生物学研究所長
元岡崎国立共用研究機構長

毛利 秀 雄

20 余年前の冬であったか、当時生殖研究部門にいた白井裕子さんからの緊急の電話を受け、私と家内は第二代基生研所長の金谷晴夫さんを見舞いに愛知がんセンターに駆けつけた。そこで何時間か、助手時代に東大の三崎臨海実験所で二人でまさに一つ屋根の下に暮らしたころのことから始まって、ずっと思い出をたどりながら本当に楽しい、しかし最後の語らいをした。別れ際に「毛利君」と彼に強く握られた腕の感触はいまだに忘れられない。

基生研ができるらしいという話は、私が助教授になった頃から耳にしていたが、およそ自分には関係のないことと思っていた。後に当時東大の海洋研にいた金谷さんが文部省内にできた準備室に行き、さらに 30 年前に基生研が発足してからも同様であった。ただし彼との長い付き合いのお陰で、私の研究室にいた何人かの院生を特別研究員などで採ってもらい、またしばしば神谷宣郎先生の「細胞運動」や金谷さんの「受精」関連の基生研コンファレンスに招かれて岡崎通いをした。一度か二度ではあるが共同研究をしたこともある。

やや間を置いて、これも以前からお付き合いのある岡田節人さんが第三代所長になってから、東大の教養学部長をしていた私にお声がかかり、基生研の評議員を務めることになって再びご縁ができた。以後再任・再任で第四代所長の竹内郁夫さんの時までつづき、最後は評議会の会長であった。

忘れもしない平成 6 年初冬（正式には翌年初頭）、当時放送大学の副学長をしていた私に突如基生研の所長を引き受けてくれないかという話がきた。教養学部で長く一般教育にたずさわって、放送大学でも数年間生涯教育に従事してきた身として、第一線の研究所を率いるようになることには大変躊躇した。しかし、畏友の金谷さんが営々努力して立ちあげた基生研のことでもあり、彼の生き様でもあった「敢えて成す」の気持ちで、所長を選ぶ評議会の会長が所長になるという異例の人事をお引き受けする決心をした。

第五代所長として私が心がけたことは三つある。第一は所長をお引き受けした経緯もあって、所内の融和をはかることである。第二はいろいろな理由で空いていたポストを埋めて研究所に新たな空気を注入すること。第三は新しいポストをできるだけ獲得して基生研、ひいては生物科学の発展をはかることである。幸いにも赴任した年には国立共同利用機関が COE に選ばれ、基生研は資金面では恵まれた環境に置かれていた。

第一の点に関しては、まず所長自らが経理を担当することとし（後に再び担当の教授を決めた）、各部門を回って研究の現状の説明を受けた。また各系・施設ごとにスタッフを所長官舎に招いてパーティーをした。この席で私が幼稚園時代に住んでいた京都の家の斜め向いに、ゲノム動態研究部門の

堀内嵩さんが住んでいたというような偶然の出会いもあった。後に春秋の基生研パーティーの他に教授や助教授・助手の会、ポストクや院生の会、技官の会（これは従来あったものに出席）などを開いて、所員が互いに知り合えるように努めた。

第二の点に関しては、休眠状態の人事委員会をも目覚めさせて、可及的速やかに空きポストを充填するように努めた。可能ならば誰かがやめた後すぐに次の人が来るようにしたこともある。幸いにもそのような中から大器晩成の大隅良典さんが学士院賞を受賞し、他の人たちも活躍中である。

第三の点に関しては、まず各分野の有識者を招いて基生研の将来計画についてご意見を伺った。その結果従来の制御機構研究系を環境と神経に分け、3系1実験施設を5系あるいはそれ以上の系にすることになった。将来計画推進のためには、事務局と教授会との会合も行なった。将来計画に関しての私の一大痛恨事は、環境と脳（神経）のブームが当方の計画と逆転してきたことである。そのため生理研が脳で10名もの増員を獲得した年に神経系を増やすことができず、翌年には環境系を独自のものとするができなかった。私としては最終段階まで文部省に掛け合ったが、時に利あらず最善の結果とはならなかった。

時代は急速に変わり、岡崎三研究所共有の施設として統合バイオサイエンスセンターが発足し、基生研もその中に確固たる基盤を築くことになった。もう一つ、まず国立共同利用機関を、さらには国立大学を独立行政法人にしようとする動きが始まり、私ども当時の所長たちは一致して、国立共同利用機関の先行法人化に反対した。その結果われわれの研究所は国立大学に順ずる法人扱いとなった。私が機構長の頃はもっぱら大学共同利用機関法人をどのような括りにするかが議論され、結果として現在のよう形になった。

私はこのようにアドミニストレーションに忙しく、およそ研究をする暇がなかったが、唯一生物進化研究部門の長谷部光泰さんの協力を得て、主に日本産チョウ類の分子系統の解析を行なった。当時そして今も基生研にはシーケンサーが何台もあるが、チョウの分類をしているような人たちが属する大学の研究室にはこれが無かったからである。今にして思えば、岡崎での8年間は皆さんのお陰で私にとってかけがえの無いものとなっている。